

文教常任委員会

- 1 開 議 平成29年6月20日(火) 午前10時00分
- 2 場 所 南別館2階会議室
- 3 付議事件及び順序

日程第1 陳情第1号 県立高等学校入学選抜で再募集実施を求める意見書採択・提出にかかわる陳情

文教常任委員会名簿

委員長	小池利雄	出席
副委員長	弓座秀之	出席
委員	星雅人	出席
	高野礼子	出席
	千保一夫	出席
	前田雄一郎	出席
事務局	佐藤崇之	出席
傍聴者	下野新聞	1名

◎開 会

午前10時00分 開会

○委員長（小池利雄君） ただいまの出席委員は6名であり、定足数に達しております。

これより文教常任委員会を開会し、直ちに本日の会議を開きます。

本日の議事日程は、タブレット端末に記載のとおりであります。

傍聴希望者がいますので、傍聴を許可したいと思います。異議ありませんか。

（「異議なし」と言う人あり）

（傍聴者入室）

◎陳情第1号 県立高等学校入学選抜で再募集実施を求める意見書採択・提出にかかわる陳情

○委員長（小池利雄君） それでは、日程に従い、議事に入りたいと思います。

日程第1、陳情第1号 県立高等学校入学選抜で再募集実施を求める意見書採択・提出にかかわる陳情を議題といたします。

事務局より他市の状況を報告させます。

事務局。

○事務局（佐藤崇之君） 近隣の市町の状況だけお話ししたいと思います。

結論からいいますと、那須塩原市、那須町とも不採択になっております。那須塩原市で不採択にした理由としましては、本市に特例校がない、私立との併願が可能のため県立が落ちても私立に進学ができるため、小中学校の統廃合が進む中で特色ある取り組みを小中学校は取り組んでいるため、高校も特色ある取り組みを行い、高校存続に努力をすべきである。県立校は経済的負担は所得の制限はあるものの、再募集があるからといって受験するとは考えにくいというような理由立てです。那須町については、再募集を行っても交通の便の悪い高校には受験をしない。専門高校が多いので、再募集を行っても行きたい学科と違ったりするため受験するとは考えられない。高校は、魅力ある高校にすべきであるとの意見があったようです。

あと、那須烏山市については、理由は聞いておりませんが採択、さくら市が継続審査、佐野市が不採択となっているようです。

（「那須烏山は不採択……」「継続」と言う人あり）

○事務局（佐藤崇之君） 失礼しました。那須烏山市が採択です。

（「烏山高校があるのか」と言う人あり）

○委員長（小池利雄君） それでは、皆様から陳情内容についてのご意見をいただきたいと思いますので、何かございますでしょうか。

千保委員。

○委員（千保一夫君） 栃木県の方針として、この再募集をしないというその県教委としての根拠、理由を
どういうふうに説明されているのかわかりますか。なぜ再募集をしないと栃木県は言っているのか。

○委員長（小池利雄君） 私も不勉強でわからないので、佐藤事務局。

○事務局（佐藤崇之君） それについては調べていないのでわかりませんが、近隣の県のお話をいたします
と、埼玉県、群馬県、茨城県では再募集、欠員補充とか、あと2次募集などはやっているようです。

○委員長（小池利雄君） 千保委員、よろしいですか。どうぞ。

○委員（千保一夫君） そこで、余り早急に結論出さないようにしていただきたいなと思っているのですが、
今の近隣の県がみんな採用している、2次募集を行うということになっているとすれば、さらに栃木県は
なぜ行わないのか。もしかしてということで、栃木県私学審議会って結構強いので、栃木県は昔から。で
すから、そういう私学審議会なんかが強くて県が踏み切れないとか、県があるいは抑制を受けてしまっ
ているなんていうことがあると、県民のプラスにならないこと、本当に15の春を泣かせないと言うけれども、
そういう意味で、余り早急に結論を出さないで、よくその辺のところを事務局で、大変でも調査をしても
らうとか、そういう時間を置いて慎重に結論を出してほしい、こう思っていますので、皆さん方のもしわ
かっていることがあれば、委員長のほうでその辺も、もしわかっていることがあれば、なぜということと、
なぜということに尽きるかな。私学とすると、やっぱり1回私学に入った者が県立校、公立校に空きがあ
ったからということで再募集して、私学へ来てくれるはずの子供が県立へまた戻ってしまうと私学の生徒
数が少なくなる。この辺がもし大きなネックになっているとすると大変なことだと思うので、その辺をぜ
ひ知りたいと思っていますのです。

○委員長（小池利雄君） ご意見はよくわかるのですけれども、ちょっと自由討議に切りかえて、委員で話
していきたくと思いますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と言う人あり）

○委員長（小池利雄君） 今の件なのですが、多分調査しても正式には出てこないと思うのです。私学から
圧力があるので、再募集はしませんなんてことは、聞いても県教委も言わないですし、と私は感じまして、
今お話聞いていて。だから、本当のところというのは、本当に県教委に聞き取りに行っても、多分県教委
の職員も本当のところは話をしてくれないというふうに思うのです。

自由討議だから、どうぞ。

○委員（星雅人君） とりあえず、本音か建て前かどうかは置いておいて、やらない正当な理由があるのか
どうかということが確認できれば、私たちでもこれはやっても無駄だとか、やる意味がないということが
わかるかもしれませんし、やらない、やることによってコストが物すごいとか、いろんな可能性が考えら
れるので、そこをちょっと期間がなくて調べ切れていないような状況でもあることなので、私も千保委員
に賛成で、趣旨自体は、私はすごい賛同するものなのですけれども、それをできない理由なのかもしれな
いので、よく調査をしたいなというふうに私も感じているところです。皆さんの意見を聞きたいと思いま
す。

（「今自由討議だから、いいですか、委員長」と言う人あり）

○委員長（小池利雄君） いいですよ、どうぞ、自由に。

○委員（千保一夫君） 空きがあって受けるとき競争率が高いと思ったり何かして、私学を受けてしまった

と。そして入学決まっている。さあ地元の高校で空きがあった、再募集しているというときに、受けさせないということが、子供にとっては非常に不幸なことなので、子供を中心に、子供のことを第一に考えて、受験することを第一に考えた場合には、公立へ行きたくないというのなら私学でもいいのですが、公立へ行きたいという子供がいるのならば、再募集でチャンスを与えるということのほうが子供にとってはメリットになります。だから、子供本位に考えたときは、なぜ再募集をしないのかの説明のほうが、本来不自然なことなのだと。そっちに抵抗を感じるので、なぜできないかが。

○委員長（小池利雄君） 私もその陳情を読んだときに感じたのは、まず第1次の選抜で足切りされた人が再度受験すると入ってしまうということは、試験がある意味学校によっては薄れてくるのではないかと。レベルという失礼になってしまうので、そこは言えないですけれども、難しい学校を受けて落ちてしまったので、こっちの県立校を受ければ何とか足切りのラインに入るというのならいいのですけれども、ある学校を受けて落ちてしまったけれども、再募集のときに受けたら次合格してしまったということもあると思うのです。そうすると、1回試験やった意味というのがここにあるのかなというも疑問に思ったときもあるのです。ただ……

○委員（星雅人君） できるのではないですか。同じ学校で定員割れしていたら再募集なので。

○委員長（小池利雄君） だから、定員割れであっても実際に今定員割れの高校で……

○委員（弓座秀之君） 落とすあれはあるよね。

○委員長（小池利雄君） 例えば、100人定員のところで80人しか受験しなくても75人とか合格者は減るでしょう。だけれども、定員まで行かないからといって再募集かけて受けられない制度になっていけば別だけれども、また同じ学校を受けて、どうせ定員割れしているのだから、では救い上げましょうとなってしまうと、その試験やった意味ってどこにあるのかなと。

○委員（千保一夫君） 別な高校を受けたとすれば。A校を受けた子が私学行っている、でもB校が欠員、定員割れしている。B校に。

○委員長（小池利雄君） 議事録に残らないから言いますけれども……

（「残りますよ」と言う人あり）

○委員長（小池利雄君） 残るのだけ。ではA校で言わないとだめだ。難しいA校受かると思って受けたのだけれども落ちてしまったと。こっちのC校だともう当然実力的に入れるという子は救い上げはされませよ。だけれども、何か定員割れすると再募集、茨城県なんかは3次募集までやっているみたいですから、そうするともう定員割れする学校には誰でも入れてしまうみたいな雰囲気が、どういうふうに変化しているのかわかりませんが。

○委員（星雅人君） 再募集でも試験で足切りで点届かないとみたいなことにはなるのだと思うのです。

○委員（千保一夫君） そのときは、足切りをもう少し下げるとか、何か再募集のときの……

○委員長（小池利雄君） 制度をうまく組めば問題はないと思うのですけれども、何かやっているところの姿をしっかり調べていないので、何とも言えないのですが、定員割れして、相当な定員割れしている学校は存続の危機になるので、入れていってしまうと思うのです。

○委員（千保一夫君） はい。それが今義務教育無償ですけれども、高校教育まで今無償化という方向来ているでしょう。そういう意味では、税金で高校も行けるように、父兄の負担というのは極力減ってきてい

ると。そういう意味では、高校も相当に定員割れしているのであれば、国民の税金で就学させているぐらい高校には就学、だから高校ももともと高校も義務教育にしてもいいのではないかという声があるくらいなので、定員割れしているのだったら、誰でもというわけではありませんが、よほどのことがあれば、それはほかの者に悪影響を与えてしまうほど成績悪い子供が入ると悪化が良化を駆逐するなんてのは困るけれども、そうではない限り、本当にやっぱり義務教育と同じぐらいに入りたい者は入れてやると。よほどのことがない限りという、そういうことで、高校まではいいのではないかという気がします。

- 委員長（小池利雄君）　そういう意味では、さっき言われたように、難しい学校を受験して2次募集、3次募集でちょっと違う学校、その空いているところを受けて入れるというのはいい制度ですし、今、私学助成も東京都なんかは、もう私学も無償化に近い状況、年収760万円だか800万円だか以下の方は、ほとんど公立高校と同じような状況に東京都なんかなっていますから、やっぱり全国的にそういう傾向は強くなってくると思いますし、そういう意味では、どこかには入れる。どこ行ってもそんなに親の負担がないという社会はいいとは思っています。だから、ここで言っている陳情の内容をよく精査しながら、他県の状況ももうちょっと調査するというのは、大切なことかなという気はいたします。

佐藤事務局。

- 事務局（佐藤崇之君）　追加で資料を配らせていただきます。

副委員長。

- 委員（弓座秀之君）　いいですか。

確かに高校入試という関門は確かにあると思うのですが、場合によっては、体調の不良とかそういうことで、最初希望したところを落ちたという子も中にはいると思うのです。そういう1度のチャンスを逃してしまった子を拾い上げるという部分では、こういう2次募集というのもいいのかなと。私の知っている人なのですが、やはりA校、B校ではなくても、もう絶対大丈夫だと言われていた、中学校の先生からでも、おまえ絶対落ちるようなことはないという、それがたまたま、上がってしまったか何だかは知らないけれども落ちてしまった。でも、別な学校に、私立の学校に行ったのですが、その子は、自分がちょっと劣ったのだらうとって猛勉強をして医者になったという人もいます。だから、そういう部分では、やっぱり拾い上げるという部分も、「本当はそこの学校に行きたかった」とは言っていましたけれども。だから、そういう部分では、今のこの制度みたいのは有効かなというか、それもいいのではないかなという、定員ということもありますけれども。

- 委員長（小池利雄君）　配布しました資料について、事務局から説明をしてください。

- 事務局（佐藤崇之君）　先ほどお配りいただいた表なのですが、28年3月のもので、1年前の古い表になってしまいますが、県立高校の合格者の状況をあらわしたものです。全日制の学校の説明をいたしますと、募集定員が平成28年の1万2,435人のところ、合格人数が1万1,940人です。そうしますと、募集定員から合格者人数を引きますと、495名が募集定員より少なくなっているのが現状です。平成27年度におきましては、募集定員が1万2,315名のところ、合格者人数が1万1,894名ですので、マイナス421名定員割れをしております。平成26年度におきましては、1万2,515名のところ、合格者人数が1万2,104名ですので、マイナス411名の定員割れとなっているのが現状です。

以上です。

- 委員長（小池利雄君） 倍率的にはちゃんとあるのだから、結局は、どうですか。
- 事務局（佐藤崇之君） 倍率的には、受験者数からいいますと平成28年度を例にとってみますと、特色選抜で5,754名受けまして、合格者人数が3,359名ということで、2,395名の方が不合格であると。この2,395名の方は、一般選抜のほうの試験を恐らく受けられると思いますので、一般選抜のほうですと受験者人数が1万686名、合格者が8,581名で、2,105名の方が不合格者になっておられます。実際には行きたい高校の偏りがありまして、宇都宮周辺の高校は大変倍率が高くなっています。交通の便が悪いような、例えば馬頭高校ですとか日光の明峰高校とか那須高校ですか、あそこら辺は定員割れしているような状況です。
- 以上です。
- 委員長（小池利雄君） トータルのには別に定員割れしなくてもいいような感じだけれども、ではやっぱり交通の便がよくて都会に近いほうが希望者が多いということですかね。
- 委員（千保一夫君） 定員割れしておいて、この高校は毎年定員割れしているので、クラス減らず、将来どこかと統合して廃止していくとか、そういう理由づけなんかにされたのでは、これはもう地方としては、県央はいいのだけれども、地方としては切り捨てられていく。小中学校と同じだけれども、周辺部から切り捨てられていく、教育の機会均等から外れてしまう。そういう意味で、県央の問題ではなくて、特に県北では深刻な問題、これから黒羽高校、黒羽高校も以前には統廃合の対象として検討された時期がありまして、それで西那須野駅から市営バスを、西那須野駅から黒羽高校まで真っすぐ行けるように、東野交通は、昔の駅、郵便局前というかもとの黒羽駅で川西駅だか黒羽駅だっけあそこ、あそこまでだった。それで大田原市営バスを黒羽高校に乗り入れするようにして、そうしたら西那須野駅、大田原市の高校生が随分黒羽高校まで行くようになった。それで、定員を満たすようになっていって、それとあと黒羽高校は、卒業生の地元定着率が高いというふうな理由も言っていて、県教委と話して、そして黒羽高校のそういう通学の利便性も高めるから、だから何とか黒羽高校はなくさないでくれということで見合わせてもらって、その間にバスを行かせたらぐんと受験生がふえて……
- 委員長（小池利雄君） 便利になったわけですね。
- 委員（千保一夫君） はい。おかげであとはそれまで黒羽高校は中途退学者が多かった。西那須野、大田原の子供たちがやっぱり黒羽まで行って、そこからオートバイか自転車でしか黒羽高校通えなかった。それがバスで行けるようになったので、中途退学者が減った。そういうことがあって、黒羽高校はもっているわけですが、それでもこういう時代ですから、また黒羽高校もいつか対象にされる可能性が出てきている。
- 委員（弓座秀之君） 旧黒磯地区からこっちへ走っているバスがないのです。だから、旧黒磯地区からわざわざ那須塩原駅のほうまで行ってバスに乗らなければならないと。くの字型に通学しなければならないというそういう不便さもやっぱり影響しているのかな。私の子供らが行っている時代には、やはり黒磯のほうからもかなり、旧黒磯地区からかなり来ているのですけれども、直接のバスがないからねという。
- 委員（千保一夫君） でも黒羽高校は、ほかの高校と比べると卒業生の地元定着率が高いのと、あと受験生の地元中学卒業生が圧倒的に多いのが黒羽高校、今の交通の利便性も絡んでいるのでしょうか。そんなことで、7割が地元の中学卒業生。
- 委員（弓座秀之君） 定着率も高いですね。

- 委員（千保一夫君） 非常に卒業生の定着率が高い。大田原高校は卒業するといなくなるけれども、黒羽高校は残ってくれるので、そういう地元貢献度が高い、こういったことがあって。
- 委員長（小池利雄君） 私も昨年、県教委から大田原のハーモニーホールの小ホールに来て、統廃合の説明の研修会みたいのがあって参加させてもらったのですが、黒羽高校も消えているわけではないのです、統廃合のリストから。ただ、そのときにいろんな質問が出て、県教委の答弁を聞いていると、やっぱり地元密着型の企画をいろいろやって、黒羽太鼓をやったり、そういう学校として地域と密着した事業をやっているのです、すぐにどうこうするということは、今の段階ではないという答弁をしています。だから、やっぱり学校の特色を生かして、今大田原もそうですけれども、特色ある小規模校は残していてもいいと。黒羽高校は定員いっぱいですけれども、クラス数は、高校としては少ないほうなのです。だから、そういう意味では、危ないのは間違いないのです。ただ、受験生も定員いっぱいまでちゃんといて、定員割れしているわけでもないですし、黒羽に関しては、余り今心配している方はいないようですけれども、去年あたりまでは結構心配で、議員も何人か傍聴に行っていましたけれども、そんな状況はあったようです。
- 委員（千保一夫君） 教育委員会、文科省、都道府県教委、市町村教委というのは、非常によその意見を聞き入れない分野でもあって、ですから教育委員会というのは、方針を決めるともう余り動かない。変更しないのです。だから、県教委なんかもう市町村の教委の言うことなんか本当に余り聞かないぐらい、市町村教委というのも県の教委の言うとおりにになってしまうので、なかなか県教委の方針決めてからではもう間に合わなくなる。だから、もう常に声を上げていて、地元からなくさないように常に声を上げていて、県教委に牽制しておかないと危ない。だから、こういうことなんかでも余り安易に県教委がそれならばきっとそれがいいのではないのかな、いいと思っているのではないかとか、きっと正当な根拠だなと思って受け入れてしまうと案外と全く別な理由になったりで、私学審議会というのは、栃木県は特に強いので有名なくらいですから、だから栃木県では私学が、私立高校なんかなかなかできないのでしょう。幸福の科学が久しぶりにできたけれども、あれは私学審議会では、地元で受験生を募集しませんということが条件みたいな。公式の条件になって記録に残っているのかどうかはわかりませんが、幸福の科学のほうからは、信者というかそこからしか募集しません。
- 委員長（小池利雄君） 地元の人は受験しないでしょうからね。さあどうぞと言ってもそんなには。
- 委員（千保一夫君） でもあれでしょう。
- 委員長（小池利雄君） いることはいるのでしょう。
- 委員（千保一夫君） 幸福の科学でこの前東大も2人入っているでしょう。ですから、かなりレベル上げてきているので、あるいは学校へ行きたいために信者になる人もいるかもわからない。いずれにしても、余計な話だけれども、そういう地元から募集しないという条件で私学審議会の承認を得るような、そういうぐらいに私学審議会強いのが栃木県の状況ということもあるので、ぜひ本当はこの私立のほうでは特色を出した高校を、私学のほうは特色を出してやっていってもらって、普通高校については、極力誰でも入れるような、そういうもう今高校は義務教育で連続した教育機関、そのぐらいの感覚で、ぜひ子供たちを救っていくべきだというのが原則かなという気はします。
- 委員（弓座秀之君） あと、少し定員も、人口減少時代に入って少子高齢化になってきているので、やっぱり今までの定員よりは少しランクを下げた、ランクというか人数を下げ、そして学校存続とする方法

をとろうとしないのですよね。

- 委員（千保一夫君） 1学級のあれを減らせばいいのだね。
- 委員（弓座秀之君） 幾らかそういう傾向はあってもいいのではないかなと思うのですけれども、特に特色学科みたいな特別な学科つくって、では普通の教育みたく、みんながそこへ行くかという、特別な特色の人はそんなにいないですから。だから、そういうところも40人なら40人というのではなくて、やっぱり特色の学科だったら30人とか25人とかとって、1クラスというようなクラス配置というか、そのあれも必要なのではないかなと思うのですけれども。
- 委員（星雅人君） 全体の話もあるでしょうけれども、さっきの今まで出ていた話をこの地元につけて再募集につけて考えると、これから人口減少が起きていくと、黒羽高校でも定員割れを起こす可能性がある。だけれども、黒羽高校はやっぱり地元定着率とかも高く、黒羽高校に行ってもらえれば地元に残る可能性もあるしということですよ。黒羽高校か大田原高校の間ぐらいの学力の子が、大田原高校を背伸びして受けて落ちたときに、私学ではなくて再募集をした黒羽高校に行けるという可能性とかを残しておくことで、黒羽高校がまだ地域と密着した高校として残るという可能性。そういうことを考えると、再募集自体はあるほうが地元にとってもよさそうだという感じが今しているところなのです。なので、やはりそっちの方向で、何でこれが再募集できないのか、しないのかというところをやはり継続審査という形で調査して、他県の理由と課題等を把握して、またあと本県のやらない理由を調査して、そこから結論を出したほうがいいかなというような感想です。
- 委員（弓座秀之君） 即決ではないほうがいいのかもしいかなですね。近隣見ていないけれども、他県のものも少し調べてみたりして。
- 委員（千保一夫君） 休会中の継続審査にして、なぜということについて、その点調べ、私も調査する…
- 委員（弓座秀之君） 時間がなかったのだね。
- 委員（千保一夫君） ぜひ調査してもらいたい。事務局、委員長、大変でも中心になって、少しその辺の情報収集をしていただいて、休会中にまた委員会を開けばいいですよ。休会中に。
- 委員長（小池利雄君） ほかにやりたいことがあるので、休会中に委員会を開いて、ほかのことも含めて一緒に頑張っていきたいと思います。
- では、ほかに意見がある方いらっしゃいますか。大丈夫ですか。
- （「はい」と言う人あり）
- 委員長（小池利雄君） では、ほかに意見がないようですので、委員間の自由討議を終わります。
- 今出た意見なのですが、たくさん意見はあったのですが、方向性として継続審査にして、県教委の考え方、それから他県の採用しているところの調査を含めてやったほうがいいのではないかと。
- 委員（千保一夫君） それと、今最後に星君が言われた地元、県北、県央ではなく県北、例えば大田原には特殊な黒羽高校、特殊事情もあるから、大田原固有の。そういったものも含めて利害は、県央と県北では利害が違うということも含めて、それも独自に。
- 委員長（小池利雄君） 次に言おうと思ったのですが、地元定着率が非常に高い黒羽高校、それから地元密着のいろんな事業をやっているということも含めて、大田原市として一番重要な黒羽高校、大田原高校

と大田原女子校がありますが、東校と、一番危険性の高いというか県教委に狙われているのは黒羽高校です。その辺の定着率は高いということ、地元密着のいろんなことを積極的に取り組んで、相撲部なんかすごい力が入っていますし、さっき言った黒羽太鼓とか、地元に対していろいろ関連してくれているということも含めて、そういう特色ある学校が残れるような形を調査をして、改めて委員会を開きたいというのが今の自由討議の結論というか皆さんのご意見ということでよろしいですね。

(「はい」と言う人あり)

○委員長(小池利雄君) では、以上で自由討議は終わらせていただきます。

では、再開いたします。

ほかに意見はございますか。

(「なし」と言う人あり)

○委員長(小池利雄君) 皆さん話してくれたからいいですね。

では、ほかに意見はないようでありますので、審査を終わります。

それでは、続きまして、陳情第1号を採択するのか継続審査とするか、委員の皆様からご意見をいただきたいと思えます。

千保委員。

○委員(千保一夫君) 今の自由意見の中で出たように、また委員長の最後の取りまとめがありましたように、継続ということをお願いしたいと思えます。

○委員長(小池利雄君) ほかにご意見はございますか。

(「なし」と言う人あり)

○委員長(小池利雄君) それでは、ほかに意見がないようでありますので、お諮りいたします。

陳情第1号 県立高等学校入学選抜で再募集実施を求める意見書の採択・提出にかかわる陳情につきましては、継続ということよろしいでしょうか。

(「異議なし」と言う人あり)

○委員長(小池利雄君) それでは、調査して継続審査ということで結論をつけたいと思えます。

それでは、陳情第1号については、継続審査となりましたので、引き続き継続して調査を行い、9月定例会前に委員会を開催して再度審査をしていきたいというふうに思えます。最終結論を出すのは9月ぐらいになってしまうかもしれませんが、できるだけ中間で、調査がつき次第委員会を開いて、皆さんにお諮りをしていきたいというふうに思えます。そういうことよろしいでしょうか。

(「異議なし」と言う人あり)

○委員長(小池利雄君) では、以上で当委員会に付託された案件の審査は全て終了いたしました。

◎閉 会

○委員長(小池利雄君) 本日は、これをもちまして閉会といたします。

午前10時32分 散会